

2024年度 保育心理士資格取得講座

発達心理学 1

—発達初期の重要性を考える—

大谷大学教育学部 渡邊大介

1

生物学的基礎

●

・生後すぐに巣を離れ、自立して生活する性質

●

・生後しばらく巣にとどまり、親からの給餌・保護を必要とする性質

2

離巢性と留巢性

● 哺乳類の分類 (byポルトマン)

・高次の種ほど離巢性に属する

	離巢性	留巢性
妊娠期間	長い (50日以上)	非常に短い (たとえば20~30日)
1回にうまれる子の数	たいてい1~2匹 (まれに4匹)	多い (たとえば5~20匹)
特徴	体毛があり、感覚器官や運動能力が成熟	体毛がなく、感覚器官や運動能力が未熟
例	有蹄類 (ウマ, イノシシなど), アザラシ, ソウ, クジラ, 霊長類 (サルの仲間)	多くの食虫類 (モグラ, ハリネズミなど), 齧歯類 (ネズミ, リスなど), イタチ, キツネなどの小型肉食獣

3

人間はどっち？

● 離巢性？

- ・妊娠期間が長く、一度に産む子が少ない
- ・赤ちゃんの感覚能力は成熟している

● 留巢性？

- ・赤ちゃんの運動能力は未熟
- ・親の保護なしには生きていけない

▶

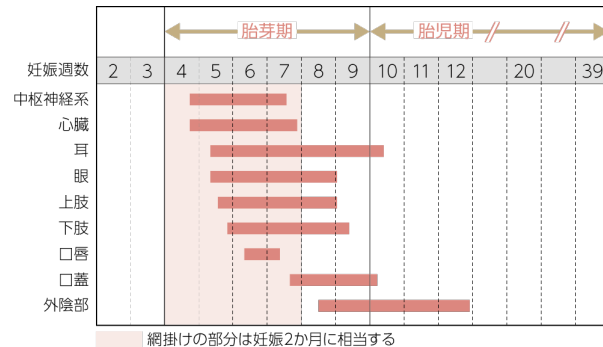
(本来は違うが、結果的に留巢性になった)

➔

4

赤ちゃんの器官形成期

- 赤ちゃんは、出生後人間らしく育てられる素地を備えてうまれてくる



5

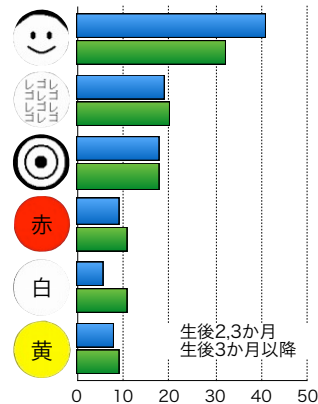
赤ちゃんは無能？有能？

- 新生児の一日
 - ・ 約80%を眠って過ごす
 - ▶ 2時間の睡眠と30分の目覚めを周期的に繰り返す
- ・ で周囲の刺激に対応

6

赤ちゃんは無能？有能？

- 赤ちゃんの視覚
 - ・ 単純な図形よりも複雑な図形が好き
 - ・ により多く反応する
 - ・ 顔から20~30cmの距離で一番よく見える
 - ▶ 授乳時の母親と赤ちゃんの顔の距離



7

赤ちゃんは無能？有能？

- 赤ちゃんの聴覚
 - ・ 生後3日の赤ちゃんに、ゴムの乳首を吸うと、お母さんの声が聞こえるようにする
 - ▶ 吸い続ける
 - ・ よそのお母さんの声が聞こえるようにする
 - ▶ 吸うのをやめる



8

愛着とその形成

● 赤ちゃんとの養育者の相互作用

- ・ 赤ちゃん→養育者
 - ▶ 泣いたり笑ったりして関心を惹く
 - ハイハイしたり歩いたりして接近する
- ・ 養育者→赤ちゃん
 - ▶ 泣いたり笑ったりすると、抱っこしたりあやしたりする

9

愛着とその形成

● 相互作用を通じて生まれる、赤ちゃんとの特別な情緒的きずな（信頼関係）



- ・ 子どもが情緒的きずなをもって特定の人に接近していく行動



10

愛着とその形成

● 発達初期の愛着形成の意味

- ・ 対人関係の第一歩
- ・ 自己肯定感、他者受容感、信頼感へと発展

→ 愛着の発達には



が重要

11

愛着の発達

● ボウルビィの愛着の発達段階

- ・ 第1段階：前愛着（生後8～12週頃）
 - ▶ 誰に対しても、目で追ったり笑ったりする
- ・ 第2段階：愛着形成（～生後6か月頃）
 - ▶ ある特定の人物（母親）と他の人との区別が明確に
- ・ 第3段階：明確な愛着（～2,3歳頃）
 - ▶ 母親のそばから離れることを嫌がり、泣いたりする
- ・ 第4段階：目標修正的協調関係（2,3歳頃以降）
 - ▶ 母親の感情や行動の目的を推測できるようになり、そばにいらなくても安心していられるようになる

12

愛着の個人差

●

- ・エインズワースが考案
- ・見知らぬ人に会ったとき、母親と離れたときや再会したとき、ひとりのときの子どもの反応から愛着を測定する方法
 - ▶ 愛着を3タイプに分類

13

愛着の個人差

	子どもの行動特徴	養育者の日常の関わり
(タイプA)	養育者との分離場面では泣いたり混乱することがほとんどない。再会場面では養育者を避けようとする行動を示す。	全般的に子どもの働きかけに拒否的にふるまうことが多い。子どもに対する微笑みや身体接触が少ない。
(タイプB)	分離場面では、多少の泣きや混乱を示すが、養育者との再会時には積極的に身体接触を求め、容易に静穏化する。	子どもの欲求・状態などに相対的に敏感である。子どもとの遊びや身体接触を楽しむ様子が見られる。

14

愛着の個人差

	子どもの行動特徴	養育者の日常の関わり
(タイプC)	分離時に非常に強い不安や混乱を示す。再会時には養育者を求めるが、その一方で養育者を激しく叩いたりする。	子どもに対する敏感さが相対的に低い。子どもに対する反応に一般性を欠いたり、タイミングがずれることも多い。
(タイプD)	顔をそむけながら養育者に近づくという接近と回避が同時的に見られる。また、不自然でぎこちない動きを示す。	精神的に不安定なところがあり、突発的に表情や言動に変調を来し、パニックに陥るようなことがある。

15

愛着の個人差

● 愛着のABC分類の国際比較

- ・各国の社会文化、子ども観、子育て観、家族形態、養育システムの差異による影響

タイプ	A (%)	B (%)	C (%)
アメリカ	23.0	62.0	15.0
西ドイツ	49.0	32.7	12.2
スウェーデン	21.6	74.5	3.9
イスラエル	13.5	69.2	17.3
日本	0.0	75.9	24.1

16

母性的養育が欠如した場合

- (マターナル・ディプリベーション)
 - ・乳幼児期に何らかの理由によって母親の養育が受けられない状態
 - ▶ 心身の障害が生じる場合もある
- - ▶ 養育者とのスキンシップが大切！

17

母性的養育が欠如した場合

- 言葉を知らなかった少女ジーニー
 - ・2歳から13歳まで虐待・監禁を受けて育ち、救出時には数個の単語の意味しか理解できなかった
 - ▶ 言語訓練の結果、半年後には約100語の言葉を使うようになり、14か月後には3語文を使うように
- ➔ 発達初期の環境や経験の重要性を示唆
 - ▶
子どもに影響を及ぼす状況の改善により、通常の成長速度を上回り、正常な発育に追いつく現象

18

ことばの獲得

- が始まる
 - ・生後1～2か月頃
 - ▶ 「アー」「ウー」：母音を中心とした音声
 - ・生後4～6か月頃
 - ▶ 「バババ」「ムウムウ」：子音が混じった反復喃語
- ➔ 自分の気持ちや要求を、泣き声だけでなく、いろいろな音声で伝えるようになる

19

ことばの獲得

- - ・周囲の人が発する音声を真似すること
 - ・日々のやり取りのなかで、その音声がどういう場面で使われるのかを理解する
 - ▶ 例) 食べ物が欲しいときに「マンマ」と発声
- ➔ 母性的養育を受けて育てられている子どもは、要求や拒否を発声・動作・指さしで表現した後、意味のある言葉を話し始める

20

ことばの獲得

- 幼児期以降のことばの発達
 - ・ 家族や保育者とのかかわりが重要
 - ▶ 日々さまざまな経験を積み、話したい内容が増え、それをそばにいる人に話すなかでことばを増やし、話し方を身につける
 - ➔ 母親や家族と、ことばの獲得以前にどれくらいコミュニケーションを図っていたかが、その後のことばの発達に影響する

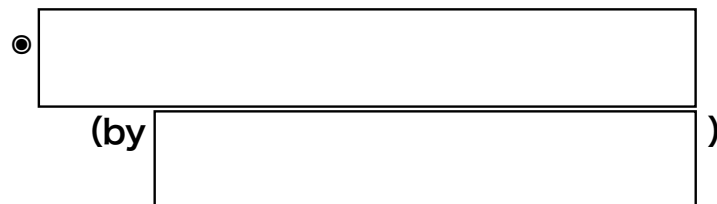
21

言語を獲得するメカニズム

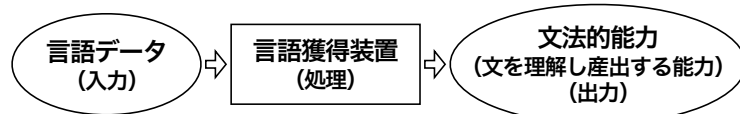
- 子どもは言語をどうやって獲得する？
 - ・ 周囲の大人に教えられる
 - ・ 周囲の大人のことばを模倣する
 - ➔ なぜ二語文発話期の子どもは、二語文以上の複雑な文を示されても二語文しか模倣できないのか？

22

言語を獲得するメカニズム

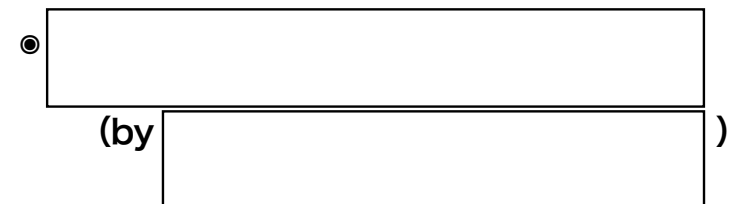


- ・ 人間の脳内に生まれつき存在する、言語を獲得し使いこなせる機能



23

言語を獲得するメカニズム



- ・ 大人が子どもに対して行う（大人同士の会話とは異なる）言語的コミュニケーションが子どもの言語獲得を容易にする
 - ▶ 母子相互作用や周囲の大人の働きかけが不可欠

24

人間関係の始まり

- ◎
 - ・生後すぐから
 - ・睡眠中などの内的に快適な状態のときにおこる反射的なもの
- ◎
 - ・生後2,3か月頃から
 - ・コミュニケーションとして笑顔を見せる

25

人間関係の始まり

- ◎ 生後数日の新生児
 - ・人に話しかけられると、その声の調子やリズム、言葉の切れ目に合わせて手足を動かす
 - ▶ 話しかける言葉であれば何語でもOK
- ◎ 2か月頃の赤ちゃん
 - ・自分に話しかけてくれる母親に喃語で反応
 - ・手足を動かしたり、口をとがらせたり動かしたりして対話的に応答しようとする

26

人間関係の始まり

- ◎
 - ・乳児と母親が情動交流を基盤にして意図理解をし、相互にわかりあえる関係
- 第一次間主観性
 - ・6か月頃の子どもは、「物-自分」「人-自分」といった二項関係でしかやり取りを行うことができない

27

人間関係の始まり

- 第二次間主観性
 - ・生後9か月以降になると、子どもは大人と同じ物に注意を向け（共同注意）、体験を共有したり、物を指さして親に話しかけたりする
 - ▶

（人-物-自分）の成立

→その後のコミュニケーションの基礎

28

発達初期の仲間関係

● 他児の泣き声への反応

- ・ 自分の泣き声のテープを聞いても泣き出すことはないが、他の新生児の泣き声を聞くと泣き始める
 - ▶ 自分以外の泣き声に情動的な反応を引き起こす仕組みが生得的に備わっている

発達初期の仲間関係

● 集団保育場面における乳児同士の相互作用

3か月頃	他児に対し、見る、発声する、さわる
4,5か月頃	それぞれが保育者に抱かれたまま、他児に手を伸ばしたり、服をつかんだりする
6か月頃	お互い見つめ合ってかかわっていかうとする
9か月頃	這って接近する、相手の発声に微笑む、物を介したやりとり